

『愛淫墮ち ―若頭に仕込まれて― 番外編』

著：高月紅葉

ill：逆月酒乱

クーラーの効いた応接室は、猛暑を忘れるほどに涼しい。

重厚なローテーブルに置かれた竹ひご細工の茶托には、汗をかいたガラス製の冷茶碗がのっている。麦茶の中で、氷が涼しげに溶けていた。

「それで、例のアレはどうなってるんだ」

正面に座る北林が煙草をくゆらせた。

「……アレ、ですか」

健一は眉をひそめて答えた。組長が真剣な顔をして尋ねるほどの問題があったらどうかと、内心で首を傾げる。

創生会北林組は、関東一円を広く治める『大滝組』の三次団体だ。

上部組織の創生会が無茶な慶弔金を指示しない限りは、月々の上納金を滞りなく納める優良団体で、そのシノギの総括を務めているのが、若干三十五歳の若頭・塩垣健一だった。

老齢の組長を筆頭に、残る幹部陣は健一よりも年長者ばかりだ。いつもドンと構えている。

つまり、金のためには働かない。他団体との渉外が主な仕事で、友好関係のみを深めてくる。『会合』という名の飲み会や、『親睦』という名のゴルフだ。『遊び』にも思えるが、健一に不満はない。

人間には得手不得手があり、相手の顔色を見る政治は健一が苦手とする分野だ。

規模の小さい北林組は、固定的な収入源となるシマも狭く、シノギには苦勞している。しかし、親代わりの北林組長を中心とした組織は、昔ながらに続いた任侠団体の雰囲気を残している。

ときどき兄弟ゲンカが勃発するのもご愛敬で、子分たちはチビチビと、けなげにシノギを上げてくる。

一次団体である大滝組の規則で薬物売買が禁止されていることもあり、基本的な収入は、昔なじみの店から徴収する『みかじめ料』や駅裏などに出す移動販売車での利益だ。もちろん、たいした金額にはならない。

その中であって、健一が切り盛りする『人材斡旋』は北林組の台所を支えていた。『長男』同然の存在として、組の稼ぎ頭になることを承知の上で請けた若頭職だ。

「アレだよ、アレ。ほら、おまえのとこの……」

ソファにどっしりともたれた北林の頬が、引きつけでもおこしたかのようにヒクヒクと動き出し、健一はふっと冷めた真顔になる。

表情を消し切れず、眉間のしわが、じわじわと深くなっていく。

ついに、重いため息をついた。

「どおーでも、よくないですかッ……？」

開いた足に両腕を乗せ、がっくりとうなだれる。

親分である北林との仲は、ざっくばらんだ。若手の前では肩肘の張ったやりとりもするが、実際はくだけている。

煙草を挟んだ指を健一に向け、北林が答えた。

「いやいや、おまえ……。どうでもいいってことはない。浮いた噂のなかったおまえだ。……なあ」

真面目に話しているようで、北林の声はすでに笑っている。

「噂のあるなしが関係ありますか？ ないでしょう」

冷静に答えたつもりだったが、健一の声にはあきらかな陰がある。くっと片目を歪め、健一はうなだれたままで言った。

「噂ぐらい、あったじゃないですか」

「どこの女を泣かせた、あっちの女を孕ませた、って話だろ」

「……孕ませてないです」

健一は力なく答えた。

性的に相性のいい女がいなかったとは言わない。そのときの気分で選べるように数人をリストアップしてただけで、愛人や恋人を決めたことはなかった。もちろん妊娠させたこともない。

北林もよく知っているはずだ。

「そんなおまえが、あぁいうのを連れ込むなんて……」

だからこそと言わんばかりに、北林は煙草をくちびるに挟む。感慨深そうに細められた目元に、健一はぞくりと震えた。

「連れ込んだわけじゃないって言ってるじゃないですか。向こうが勝手に……」

顔を上げた健一は、やや食い気味に言い訳した。身体が震えたのは、北林が恐ろしいからじゃない。

年寄りの勘違いが暴走しそうになっていることへの恐怖だ。

「勝手に許してるのは、おまえだろ？」

さらりと言い返され、健一は額を押さえた。そのまま天井を仰いで唸る。

「いまさら、なにを言っても無駄だろう。あんな若い子のせいにして、なあ……。いつまで、逃げ回ってんだ」

からかって楽しんでいたはずの北林にくるりと手を返され、ど真ん中ズバリの正論を投げかけられる。まっとうな意見だ。ごもっとも過ぎて、健一の胸はちくりと痛んだ。

肝心な一部分から外れることを嫌う北林は、古い仁義を持っている。そこを信頼して、北林組に身を寄せたのだ。

だからこそ、話題の核心が見えてしまう。言われることはわかっていた。

「いい加減に腹をくくって、挨拶に行ってくい」

北林はニヤリとも笑わない。目元に刻まれたシワも動かなかった。

「……組長がチクらなかつたら、バレなかつたんですよ」

子どもが親にするような、拗ねた表情を向ける健一に、北林は肩を揺すって笑い出す。目元のシワが一気に増えた。

「よそから噂が回るよりいいだろ。感謝しろ、感謝」

「……ういーツス」

まったく納得していない健一は、やさぐれた返答でふざけながら、テーブルに置いた煙草の箱から一本抜き取る。口にくわえ、火をつけた。煙を吐き出し、膝の上に肘を突く。

一連の仕草を黙って眺めていた北林は、聞き分けのない子どもに対するように息をついた。

「いつまでも逃げ回れないぞ。手元に置いておくな、そのつもりで対処しろ」

真実がどこにあるのかを聞かないのは、北林の度量の広さだ。

そのついでに面白がってしまうから、親心はいつも台無しになる。

健一は黙って煙草を吸った。話を切り上げない北林は、考え込む健一を見守り、いまここで考えさせようとしている。応接室を出れば、生活のせわしなさでうやむやになるからだ。

発端は今年の夏の初め。つい、この間のことだ。

愛人のような相手を作っても、決して自宅には入れなかつた健一が、ひとりの青年と暮らしはじめた。そのこと自体は、どうということもない。不良がひとり転がり込むようなことは、よくある。

しかし、実態は複雑だ。

借金のカタに売られた大学生をシノギのために仕込んだつもりが、健一はうっかりと過去の因縁を引き当て、抜き差しならない関係は次第にこじれた。同郷のよしみで同情したわけじゃない。

当時、まだ幼い子どもに過ぎなかつた聡は、しがらみに巻かれて窒息寸前だつた健一の胸に傷を残した。いわゆる青春の痣だ。ふたりの間に、なにがあつたわけじゃない。近づけば非日常に転がり落ちると感じた健一は踏み込まなかつたし、相手もまたそれどころじゃなかつた。

特別じゃないからこそ異質な記憶は息苦しく、育児放棄と虐待を乗り越え、ごく普通の学生になつていた聡を遠ざけようと、健一はふたりの関係を断つた。

まだ終われる。始まってもない、と思つていた。

せつかく過去を乗り越えて暮らしているのだから、これ以上、人生に傷を増やさなくてもいい。健一は、大人の思慮で答えを出した。

しかし、聡は想像よりも、ずっとずっと若かつたのだ。けなげなを振りをして、あきらめが悪く、気弱な外見の内側には情念を抱えていた。

ヤクザ同士のいざこざの責任を取るため、健一が指を詰めるとヤケを起こしたとき、縁を切つたはずの聡は飛び込んで来た。

幹部が勢揃いしていた応接室に、単身で。

しかも、全裸だつた。

意表を突けば、周りの気が削がれると考える聡の突拍子のなさが健一には恐ろしい。聡の思惑通り、幹部たちは驚き呆れ、面白がつた。

組長の北林までもが携帯電話で動画を撮り、拳げ句の果てに、健一の色事の師匠へ送りつけてしまったのだ。彼にだけは、聡の存在を知られたくなかった健一の本心など知りもしない。

結果、健一はずっと逃げ回っている。

挨拶だとか、紹介だとか、冗談じゃない。

師匠の名前は、岩下周平。

天下の大滝組幹部で、若頭補佐のひとりだ。

もっとも困難で、もっとも手がかかると評判の『渉外担当』をこなし、大滝組の母体となる直系本家では金庫番としても名高い。

ヤクザとしての出自は、女衞の色事師だ。女を墮とし、淫乱に仕込んで金に変える。彼が手を加えれば、女の価値は二倍にも三倍にも跳ね上がった。組織内で、愛人に買い受ける幹部もいたぐらいだ。

弟子として付いていた時代を思い出し、健一はぼんやりと煙草を吸う。吐き出した白い煙がもやのように広がって、爛れた日々が思い起こされる。

岩下の存在は大きい。同じ空気を吸っただけで、女がヌラヌラに濡れるほどの色男だ。腰高で胸板が厚く、すらりと脚が長い。眼鏡をかけても凜々しい目元は眼力が強く、うっすらと浮かべる笑顔が息を飲むほどに艶めかしい。

女を色事に迷わせてもてあそぶ男を『色悪』と呼ぶのだと、健一は北林から教わった。岩下には、その言葉がよく似合う。

落第することなくお墨付きを受け、仕事を分けてもらったあと、健一は北林の子分になった。岩下の舎弟に取り立てられなくてよかったと、心底ホッとしたことは、まだ生々しい記憶だ。

「俺にも早く紹介しろ」

沈黙を守る健一に痺れを切らした北林が口を開く。

「相手はカタギの大学生です……」

健一はため息をついた。

「って言うか、どう紹介するんですか」

「どうするつもりなんだ」

質問に質問で返され、健一は視線を逃がす。

北林が父親めいているのはこういうときだ。子のいい加減さを許さず、詰めるところはきっちり詰めてくる。

「おまえを拾ったとき、必ず一人前にすると、岩下に約束したんだ。……その学生さんを煮るなり焼くなり、それは、おまえの好きにしろ。でも、通す筋はあるんじゃないか？」

とっさに全裸で飛び込むような向こう見ずだ。

顔つきはおとなしいのに、やることが危うい。

女であったなら『情人』の一言で済むが、なまじ性別が男なだけに、手元に置くのなら関係性をはっきりしておく必要がある。

他の幹部たちと違い、親である北林や世話になった岩下には話を通しておかなければならない。もうすでに、聡が絡んだ問題で、ふたりの手を煩わせているから、なおさらだ。本当なら、

怒鳴り飛ばされていても可笑しくない。

「健一。おまえが、こうと決めれば、その通りに扱ってやる。仕事で使うつもりはないんだろ
う。手伝いはさせないのか」

「……だから。まったくのカタギだって言ってんじゃないですか」

「カタギを全裸で飛び込ませるなんて、うちの連中はなにをやってんだろうなあ」

「それは、俺の不手際です」

正確には健一の舎弟たちの不手際だが、彼らの失敗は健一の失敗でもある。

「……あれが、おまえの好みか」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>